

△▼ 在外研究報告 ▼△

文化・言語の合流点にてーボリビア、コチャバンバ県ー

梅崎 かほり

2022年11月1日、万聖節（fiesta de Todos los Santos）。日本の「お盆」にあたるトドス・サントスの祭日、ここボリビアのコチャバンバ市内では、直近の1年間に家族を亡くした人たちが自宅に祭壇を設け、故人の里帰りを迎えつつ、親族やご近所さんたちの訪問を待つ。門に目印の輪飾りがあれば、誰でも立ち寄ってお参りすることができる。祭壇には故人の好物だった食べ物や飲料、この日のためにこしらえられる人や馬やリヤマなどをかたどったパン、色鮮やかな飴飾りなどが並べられる。祈りを捧げに訪れた人にはチチャ（ト

ウモロコシの発酵酒）やビールなどが振る舞われ、パンやクッキーなどの手土産が渡される。

翌2日の正午には、祭壇の供え物をすべて墓地へ運び、故人の眠る墓の前に再び祭壇を作って、人々の訪問を待つ。この日、墓地に祈りを捧げに来た人たちは、祭壇の供え物を少しずつもらって持ち帰ることができる。祭壇を訪れると、祈る前に「どれにする？」と聞かれ、故人に祈りを捧げた後には、やはりチチャなどが振る舞われて、選んだ供え物を手土産にと渡される。供え物がすべてなくなったら、祭壇を畳み、再びこの世を去る故人の見送りが終了する。

このイベントを楽しみにしているのは子供たちだ。見知らぬ家庭の祭壇にやってきては、一番大きな人型パンを指さして、買い物でもするかのように「これはいくら？」と尋ねる。すると、祭壇の主は、「聖母マリアの祈りを6回、主の祈りを6回…」などと「値段」をつける。子供たちは一生懸命覚えたそれらの祈りを繰り返し、指定の回数を唱えようと、大きな戦利品を満足気に持ち帰るといふ具合だ。果物の一山や小さな菓子パンの一盛などは、もっと少ない回数の祈りでもらうことができる。幼い子供が故人に手を合わせ、いくつも



室内に設けられた祭壇



墓地で祭壇に祈りを捧げる人々

のカトリックの祈りを誦んじる姿を見ると、習慣や信仰はこうして受け継がれるのだなあと感じる。

万聖節はカトリックの祝日で、ここでいう「祈り」も、スペイン語で唱えられるカトリックの教えの一節だ。しかしボリビアで一連の儀式に立ち会うと、ヨーロッパ由来のものとは思えないほど土着化している。特に農村では、女性たちの多くは先住民特有の衣服をまとい、祈りを唱え終わった後の会話は大半がこの地域の先住民言語であるケチュア語で交わされる。墓地ではケーナやタルカといったこの地域特有の笛で土臭い旋律が奏でられ、やはりこの地域特有の技術で醸したチチャが酌み交わされる。ここでは、スペイン征服前の土着的要素とスペイン的要素が、もちろングローバル化の影響も受けながら、絡み合い、混ざり合い、ぶつかり合って、なんとも興味深い文化を形成している。

2022年4月より在外研究期間をいただいた私は、このように文化や言語が交錯する地域で一年を過ごすことにした。都市に暮らす農村出身の女性たちの多くは、日常からポリェラと呼ばれる先住民特有のスカートをはいて過ごし、祝祭や親族

の集まりなどの折々には村へ戻る。日々スペイン語で暮らしているように見えるが、村の馴染みや地方出身者同士では会話がケチュア語に切り替わるバイリンガルである。彼女たちの装いも言語も、被征服者または「田舎者」のシンボルとして、長らくこの社会では差別を受けてきたものだ。それでも、21世紀の今もなお、ボリビアにおける一つの文化として鮮やかに息づいている。20世紀の半ばから現在にかけて、政治的・経済的にも大きく変化してきたボリビアで、彼女たちはどのように社会を見つめ、アイデンティティを育んできたのか。そんなテーマに取り組むために、ケチュア語を学び直し、農村を訪れ、また、都市で働く先住民女性たちに聞き取り調査を行う日々を送っている。このような貴重な時間をいただいたことに、この場を借りて感謝の意を表したい。

Qhichwa simimanta t'ukurispa (ケチュア語考)

私はこれまで言語学を専門にしてきたわけではないが、コチャバンバはボリビアの中でも特にスペイン語と先住民言語との言語接触が顕著な場所だ。そのような土地で先住民言語に関わる研究に着手したことで、これまで以上に言語について考える機会が増えた一年でもあった。言語研究センターのNews Letterに寄稿させていただくこの機会に、今年度私がどっぷり浸かることとなった「ケチュア語」について少し書いてみようと思う。

ケチュア語は15世紀に南米大陸に栄えたインカ帝国の言語として知られている。インカの統治が広範囲に及んだこと、また、スペインも先住民社会の統治にあたりこれを用いたことから、現代でもコロンビア南部〜チリ・アルゼンチン北部にわたるアンデス地域一帯で広く定着し、およそ

800 ～ 1000 万人の話者がいると考えられている。

元々書き文字をもたない言語で、スペインによる征服以降、アルファベットを用いた表記法が確立された。今日では正書法も定められ、学校教育などに取り入れられているが、話し言葉としての性格が強く、流暢に操る母語話者であるからといって読み書きができるとは限らない。また、教育者の間にも、現在の正書法は綴りと発音のルールが難解で効率が悪いと批判する声もある。実際、小学校で習い始めたばかりの子供は綴りと発音を結び付けられるが、母語話者が自らの発話を適切

に文字に起こせないといったケースが多いのも、そのあたりの事情によるのかもしれない。

ケチュア語は名詞や動詞、形容詞などに接尾辞（場合によっては接尾辞の連続）を添えることによって文を構成していく膠着語で、文法的には英語やスペイン語よりも日本語に似ている印象を受ける。次の例文①にみられる通り、形容詞は名詞の前、副詞は動詞の前、目的語も動詞の前に置くといった原則のため、語順は特に日本語に類似する。同じ文をスペイン語で表現した②と比較するとなお分かりやすい。

① Chay juch'uy wawa-qa waqa-spa mama-n-ta mask'a-chka-n.

その 小さな 子[主題] 泣く[現在分詞] 母[3 単所有][対格] 探す[現在分詞][3 単現在]

※本来ハイフンは用いないが、接尾辞を明確化するために付し、イタリックで記す。また注解では接尾辞を[]で示した。

② Ese niño pequeño está buscando su mamá llorando.

その 子 小さい 探している 彼の母を 泣きながら

しかしながら、長年にわたるスペイン語との接触の影響が顕著な例もある。次の例文③は、9月にスペイン語の地域変異に関する調査に参加させてもらった際のもので、スペイン語の一文をケチュア語で表現してもらおうという予備調査からの引用である。回答には④のようにすべてケチュア語の語彙で、上記の語順ルールで表されたものもあったが、⑤のようなものもあった。ここでは、名詞・動詞・副詞の語根にはいずれもスペイン語の語彙が用いられ、そこにケチュア語の接尾辞が

付く形になっている。ケチュア語の語彙は指示詞“kay (この)”のみである。また、スペイン語の複数形の-s が用いられている点も特徴的だ。同様の接尾辞がケチュア語にもあるにもかかわらず(-kuna)、コチャバンバではケチュア語の名詞にも-s を付けて済ませる話者が実に多い。さらに、③④と比較すればわかる通り、語順がスペイン語のように「動詞+目的語」となっている点にも注目されたい。

③ Venderán estas verduras a buen precio.

(彼らは) 売るだろう これらの 野菜を 良い値で

④ Kay q'umir-kuna-ta¹ sumaq chani-ta² ranqha-nqanku.

この 野菜[複数][対格] 良い 値[副詞化] 売る[3 複未来]

⑤ Baratu-ta² vende-nqanku kay verdura-s-ta¹.

安い[副詞化] 売る[3 複未来] この 野菜[複数][対格]

アンケートを集計しながら、ほとんどスペイン語に見えるこの回答につい笑ってしまったが、言語学的には笑いごとではなく、実に興味深い現象なのだと思う。単語レベルでの借用が多いのは他言語でも珍しくないが、ここでは語順や接尾辞までもがスペイン語の影響を受けながら、それでも「ケチュア語」として話されている。借用語は主に政治・経済・科学技術的用語など、もともとケチュア社会になかったものに用いられるが、今日とくに都市部では、既に定着したスペイン語の語彙がケチュア語の語彙よりも身近になり、ケチュア語での発話に用いられるという事象が多くみられる。このような話し方をするのは特に、都市で日常的にはスペイン語で暮らすケチュア語話者である。彼らは同じことをスペイン語で言えるにもかかわらず、これほどスペイン語の要素を織り交ぜながらも「ケチュア語」で話すことを楽しんでいる。曰く、「ケチュア語は響きが美しく、言い回しが率直で魅力的」なのだそう。どのような話題にケチュア語を用いるか、そしてケチュア語の語彙と基本的構造にどこまでこだわるかは個人に委ねられるため、文法は柔軟になり、話し方が何通りも存在する。それがコチャバンバの言語状況の面白いところではないだろうか。

私がケチュア語という言語を知ったのは、学生時代に初めてポリビアを訪れ、この町に滞在した時だった。当時はスペイン語すら習得しておらず、ポリビアどこからラテンアメリカに関する知識もほとんどない状態だったが、なぜかこのケチュア語の存在や音に惹かれ、その2年後大学院に入って、短期ではあるがケチュア語の集中講義を受けるためにこの町に来たこともある。

今回改めて学び始めて気づくのは、擬音語や擬

態語が多いということ、自然を描写する表現が豊かだということ、口承の物語に長けていて、口調や繰り返しや伝聞の表現に素朴なおもしろさがあるということなど。スペイン語では説明できない意味合いや、訳すと失われてしまう味わいが確かにあるということだ。商業化が進み、随分少なくなってしまったが、ケチュア語で歌われるポリビアの歌謡曲はなんとも甘美な響きをまとう。なるほど、スペイン語化が進んでも、この言語への愛着を失わない人たちが多くいるのも頷ける。学べば学ぶほど、外国人の私もその魅力に取りつかれていく。

ポリビアでは、2009年以降の新しい教育政策で先住民言語の復興・振興が掲げられ、義務教育の一環で学ばれるようになったものの、先住民に対する根深い差別意識や、都市化・グローバル化の進行で、順調に話者数が復活しているとはいえない状況だ。知識としては備えている、聞けばある程度理解するという人口はともかく、日常的にこの言語で暮らす若者は減少し続けているとされる。それでも、1990年代ごろまで「先住民言語はあと20年もすれば消滅する」と言われていたことを考えると、時代は変わったなあ実感する。たとえ混交が進んでも、失われる気配は感じられない。少なくとも、コチャバンバの日常からケチュア語がなくなることは想像しがたい。

一つの言語が失われることは、一つの文化が失われることに等しい。農村での調査で、ケチュア語ではしゃぐ子供たちを見るたびに、この言語が世代を継いで生き活きと話される光景を思い描いては、未来がそうであることを強く願うばかりである。